

御座いませう、僕はミランの宮廷へ行きます、明日にも行きませう僕は決心したです。」とプロセウスは今女から名残惜しい手紙が来たのを、父に詐つて父の勧めに反すまいと答へたのであつた。

ジュリヤはプロセウスが長く来られないと云ふことをきき、最う今は冷淡を装はずに互ひに離別の言葉を交はし、互ひの思ひ出と指環を取り換へ、親友バレンタインの後を追ふてミランに出發した。

バレンタインはミラン公の寵遇を得たとは詐り、己が誇りを捨て、プロセウスと同じく戀に耽弱して居た、其の相手はミラン公の娘のシルビア姫で、二人の戀中は公爵には秘して居たので、公爵は此れを貴族のデュリオに娶さんと思つて居たので、一日バレンタインと戀敵のデュリオがシルビアの許に、落ち會つて姫はバレンタインを厚遇し、デュリオを嘲笑した其の時に、公爵が入つて来て今君の友達のプロセウスが到着したと話した。「ならう事なら此處へ連れて来て頂きたい、此處で面會したいのですから。」とプロセウスの事を大に公爵に向つて賞め、

「僕は怠情者ですけれど、あの人は勉強家で人格も高く、立派な紳士で御座います。」

「そんな御方なら大に歓迎しよう。」

その間にプロセウスは此の室へ入つて来たから、バレンタインは姫に紹介して、

「どうか僕同様に御別懇を」

と云つた、やがて二人切りになつて、バレンタインは、

「どうして此處まで君は来たのだ、君の戀人はどうした？」

「僕の戀物語なんか、君はそんな事に趣味が無いから却つて御氣の毒の次第だ。」

「いや僕の生活も變つたよ、今僕は戀の味を知つた、戀は僕の禁制の眼からはなれて活動して居る、君、戀は力強い帝王だ僕を賤しくさせて仕舞ひ、僕は此れについては悲しまない戀の奴隷となつて喜んで居る、戀を除いては今他話もない。」

此の白状をきいてプロセウスは大に勝利を得た様に、戀につき語り合つて居たが、プロセウスは先前シルビアを一目見るなり、大に心が動いて此のバレンタインは自分のいやな友達となり、ジュリヤを見捨て、此の友の戀敵にならうと思ひ込んだ。

バレンタインは此の戀物語りを話し、女の父の公爵には話もしないし、到底遂げられるべき仲では無いから、夜に此の宮殿を逃げて出して一緒にアンチニアに行かうと、シルビアと相談がしてあるので、此れは宮殿の窓から姫の逃げるのに便利の様にと、繩梯子を出してプロセウスに見せた。

此れを聞いたプロセウスは自分の身に隠し置くべき、友誼を忘れて此の事を残らず公爵に話し、繩梯子の一件まで密告したのを聞いて公爵は、親友の事をかくまでに其の秘密を話して呉れた此のプロセウスの忠義顔を不思議に考へたが、大に御禮を云つて此の事はバレンタインには知らせないことにした。

夜になつて公爵はバレンタインの來るのを待つて居ると、バレンタインは外套の下に繩梯子を持つて宮殿の方へ忙いで行つたので、呼び止めて、

「どこへそんなに急いで御出でか？」

「僕の手紙を朋友にやつて貰ひたいために、頼みに行くのです。」

「それは其んなに必要な手紙かね？」

「僕は貴郎の宮廷で非常に健康で又幸福に暮して居ますと、父へ言傳けて貰ふんです。」

「いやそんなら、一寸止りなさい、一寸御相談が願ひたい事があるから。」

公爵はバレンタインの秘密を探らんとするために、旨く話しかけて、
「君は娘をチュリオと取り合ひをして居るさうだが、彼女は誠に頑固で乃公の命令をきかない、併し何方らにしても乃公の娘だから、君に云ふけれど彼女の傲慢なことには乃公も愛想がつかた、乃公ももう娘に養つて貰はなきやならぬ年だが、乃公も一人妻が欲しい而して彼女は誰かに呉れてやらうと思ふ、彼女は美しい丈けが持參物で彼女は乃公も乃公の財産も何んにも入らないと云つて居るがね。」

「それで僕には何か御用なので御座いますか。」

「其の妻にしようと思ふ女は、美しいが内氣で困るんぢやが、どうして其の女を引つばつたがい、か一つ君に、教はりたいたと思ふてな。」

其處でバレンタインは女の愛を求めめるには、贈物、屢々訪問する事だの種々と話してやつた、併し公爵は其の女は贈物を拒み、父の監督が厳しく引き出すのが六つかしいと答へ

た。

「ちや夜に尋ねて御出でになればいゝのです。」

公爵は此處ぞと、

「夜は女は嚴重に戸が閉ちて鍵がかゝて居るよ。」

バレンタインは其れでは、繩梯子を持つて忍んだらいつたらうと、つい浮か／＼と話し其れは外套の下に隠して置くに限ると教へた。

「ちや君の外套を借して呉れ給へ。」

と直ぐにバレンタインの外套を握つて、後に投げると繩梯子とシルビアの手紙が見出され、手紙は此夜の手筈がかいてあつた、公爵は庇護つてやつたバレンタインの此の不實な考へを怒つて、ミランの市から追放して、バレンタインはシルビアを見る事さへならぬ必ず夜の中に退去する様にと命せられた。

此の間にジュリアはプロセウスの留守を窺つて居たが、遂にミランに行つて戀人プロセウスに會はんものと、侍女ラツセタと二人男装して途中の危険を避けて、バレンタインが

退去後間もなくミランに着いた。

到着後ジュリアは旅舎について、其の主人とプロセウスの事を話して様子を探つて見たが、主人は此美男子の紳士はきつと、高貴の人と思つて親しく答へ、此の人が心配さうな顔をして居るから、面白い音楽があるからきゝに行かうと勧めた、ジュリアは益々心配になつたのはプロセウスの事は判らぬし、愛しては居て呉れるが自分の位地に比べると、己れはプロセウスに劣つて居ることを心配して、此の心配が顔に表はれたのであつた。

音楽は一紳士が女主人に奏するのだと云ふことで、主人の勧めに従つて行くことにした、若しやプロセウスに遇へるかも知れぬと思ひながら來た所が、思ひの外其の奏樂の紳士は戀人プロセウスで、シルビアに戀や美しいことを讚めながら、シルビアと音楽を奏すとの事を見て大いに悲しさが胸に迫つた、ジュリアは窓越しにシルビアとプロセウスの話して居るのをきき、シルビアはプロセウスが戀人を捨て、其の上に、不實にも朋友バレンタインの秘密を曝露した事を責め、音楽やプロセウスの言に耳もかさないで去つたのを、見て居た。

然し此れでもジュリアの心はプロセウスに離れ難く、プロセウスが下男を解雇したことをきき、自己は旅舎の主人の力をかりて其の給仕に住み込む事にしたが、プロセウスは其れがジュリアとは知らないで、シルビアの許に戀文の使ひやら、ペレナの市にて、別れの時に與へた指環を贈る使ひを命じた。

シルビア姫の許へ来て見ると、姫はプロセウスの挑みを拒んだのを見て大に喜び、今はセバスチャンと名を代へたジュリヤは、姫の室の中でプロセウスの見捨てた女の話しをした。

シルビアは大にジュリヤの事を同情した、ジュリヤは、「私はこのジュリヤと云ふ女を知つて居ます、が、あの怠情者のプロセウスさんを愛するなんて馬鹿ですよ、丁度丈恰好は私の通りです、目も髪も私の通りで、子供の風をさせるに美しい少年になります。」

やがてジュリヤはプロセウスの贈物の指環を出した。

「此の指環はジュリヤさんがあの人に贈つたと云ふ事は、折り／＼聞いたのです、其んな

ものは私が入りませぬ、私は御前が好きだ其の哀れな女を可愛いさうだと思ふ點に於ても、愛します此の財布はジュリヤさんのために御前に上げませう。」

かのバレンタインは退去の身とていかに、父の家へ歸る顔はなく其の後の様子は知らないで、淋しい森林中を彷徨してゐる中に盜賊の群に出遇ひ金を強請された、バレンタインは自己は放逐の身で着のみ着まゝ、金は少しも無いのだと答へた、盜賊は此の人は今困つて居ると思ひ急に同情心が起つて、一緒に仲間入りをすればいい、自分等の親方になつて呉れ、いやとならば殺して仕舞ふといひだした、バレンタインは一緒に盜賊生活をして見るとも良からう、然し哀れな旅人や婦人には害を加へまいと思つて、遂ひに此の盜賊の親分となり、シルビア姫に見出される事になつた。

姫は父からの強請に依つてチュリオと結婚する事を嫌ひ、聞けばバレンタインは、マンチスアに住んで居るとの事、一層其處へ逃げ出さんものと、エグラモーアと云ふ老貴族と共に父の宮殿を逃げ出した、バレンタインの棲んで居る森林中に来懸つた所へ盜賊の一人はシルビヤを捕へたが、老人エグラモーアは逃げて仕舞つた。

恐れ振へて居る姫を捕へて親分の住んで居る洞穴へ連れて来ると、親分は婦人に對して親切な人だつたから大に安心して、

「お、バレンタイン様、此れも貴郎のためで。」と云つて居た。

此の間にプロセウスはジュリヤの給仕の姿になつて居るのを連れて、シルビヤの逃走の後を追つて来て、此の盜賊の手からシルビヤを救つたけれど、一向御禮も云はないで又苦痛を増すので、プロセウスは尙ほ一層結婚を強いて居るのを、傍のジュリヤは聞いて此れがために自分の愛は取られはしまいかと、心配して居た。

其處へ不意にバレンタインが捕へて来た婦人を慰め様と、現はれたのを見て一同の驚きは甚だしく、茲に於てプロセウスは大に耻ぢて、バレンタインを許いた罪を後悔した、バレンタインの高尙なる性質は、即刻プロセウスの罪を赦し昔し通りの交際になると云ひ、

「僕は君のためにシルビヤの事は思ひ切つて、君に捧げよう。」
此れを傍にきいて居たジュリヤは、最う己が戀の叶はぬことと思ひ昏倒して仕舞つた。
一同は此の介抱に力を盡くした、やがてジュリヤは正氣に歸つて、

「私は旦那様が此の指環をシルビヤ様に御渡しする様にとの事を今まで忘れて居ました。」
プロセウスは見ると、此れはジュリヤに渡した指環なので驚いて、

「おやつ、此れはジュリヤの指環だ、どうして此れを持つて居るのだ。」

「ジュリヤが自分で持つて居ました、ジュリヤが茲まで持つて来ました。」

プロセウスが此の顔を見て居ると、決して給仕のセバスチャンでなくしてジュリヤ其の者で、固き眞實の戀に自分の胸を刺す様に答へ、プロセウスは此の親しかつた女を再び己

れの者となし、シルビヤはバレンタインと喜んで手を取つた。

此の歡樂の瞬間に其の場へ公爵とチュリオは、シルビヤの後を追つて来たので、チュリオはシルビヤを見るなり近寄つて、

「シルビヤは僕のものだ。」

「今一度言つて見ろ、貴様の命はないぞ、乃公の戀の邪魔をするか。」

臆怯者のチュリオは此れを聞いて逃げ出した、最う姫は入らぬと云つた、公爵は此れをきいて大に怒つて、

「娘をそんな風に捨てるとは、不届の奴だ、お、バレンタインさん貴郎の御氣象には、感服しました、どうか娘を貰つて下さい、貴郎は丁度適して居る御方です。」

バレンタインは大に喜び、此の公爵の手に接吻して其の贈物を受けた。

公爵は森の中の盗賊の罪を赦して、種々の職業を興へた、盗賊の大部分は罪を犯したと云ふよりも、バレンタインの横な状態で國を通れたものだった、プロセウスは公爵の前で、自分の罪を後悔した事を述べ、戀人共四人は打ち連れてミランの市へ歸り、此の新夫婦共は大した御馳走で領主の面前で結婚の式が擧げられたのであつた。

通俗シエークスピア物語 (をばり)

大正五年二月十二日印刷
大正五年二月二十日發行

通俗シエークスピア物語
非賣品

通俗書 不許複製

編輯者 通俗教育普及會
代表者 日向 甲
印刷者 猪木 卓二
印刷所 通俗教育普及會印刷部
東京市麹町區飯田町二丁目五十五番地

東京市麹町區飯田町五丁目二十六番地
通俗教育普及會出版局

電話番町七九二番
振替東京二五五〇三番

賜天覽蒙台覽

通俗教育 赤穂誠忠錄 全一冊

陸軍大將男爵福島安正閣下題字
宮內省御歌所岡山高蔭先生題字
文學博士芳賀矢一先生序文
藤川臨風先生序文
通俗教育普及會編
杉浦非水先生裝釘
井川洗屋先生
濱田如洗先生

菊判總ノロ一ス
天金裝釘願美
箱入紙數壹千九百餘
定價金四圓五拾錢

特別割引頒布價格 金貳圓九拾錢 送料內地二千錢
海軍大將元帥伯爵東鄉平八閣下題字
醫學博士男爵佐藤 進閣下題字
宮內省御歌所岡山 高蔭先生題字
東京高等女學校長柳橋 絢子刀自題錄
農、文學博士上田 萬年先生序文
醫學博士新渡戶 稻造先生序文
文學博士森 林太郎先生序文
通俗教育普及會編

通俗教育 古今孝子錄 全一冊

特別割引頒布價格 金壹圓八拾錢 送料內地十六錢
藤川臨風先生著述
通俗教育普及會編 杉浦非水先生裝釘
濱田如洗先生
井川洗屋先生

菊判總ノロ一ス
天金裝釘願美
箱入紙數約一千
定價金壹圓五拾錢

通俗教育 豐公英雄錄 全一冊

特別割引頒布價格 金壹圓八拾錢 送料內地十六錢

菊判總ノロ一ス
天金裝釘願美
箱入紙數一千餘
定價金壹圓五拾錢

355
33

終

